

北山惣社御神楽と綾小路信俊

中 本 真 人

はじめに

応永八年（一四〇一）十二月一日、北山惣社御神楽が開始された。この御神楽は、足利義満の北山第に鎮座した北山惣社において、毎年十二月一日に行われた恒例行事である。

この北山惣社御神楽について、綾小路信俊は「仙洞御願」に准じられたと記した。当時の義満が院のごとく振る舞ったことを示す同時代史料であると同時に、かつては「皇位篡奪計画」説の有力な根拠とされていた。^①近年は、義満の院のごとき言動は、後円融院に代わって後小松天皇を後見する目的と考えられており、義満に皇位篡奪の意志があったとする見方は、ほぼ否定されている。^②

その一方で、北山惣社御神楽については、応永八年の開始時に取り上げられるばかりで、恒例行事としての実態は、ほとんど明らかにされてこなかった。「皇位篡奪計画」の是非はともかく、この行事に義満や義持、あるいは朝廷や大名がどのように関わったのかは考察の余地を残しているよう。

本稿では、まず西園寺の北山惣社から検討を始める。さらに北山惣社と祭祀についても、西園寺時代からの連続性の中でとらえ直したい。また北山惣社御神楽に対して、義満はどのように関与したのか、義満没後はど

のような展開をたどったのかも整理する。さらに、この御神楽の詳細を記す『信俊卿記』にも注目し、義満と綾小路信俊の関係から史料の性格も考えてみたい。

一、西園寺時代の北山惣社と里神楽

応永元年（一三九四）十二月に將軍職を嫡子義持に譲った義満は、翌二年（一三九五）に出家した。さらに西園寺家と河内の所領を交換して北山第を取得し、同四年（一三九七）に移り住んだ。その北山第に鎮座したのが北山惣社であったが、社殿などが現存しないため、その場所は特定されていない。ただし、細川武稔は「衣笠山東麓かつ字多川の西側に、『大北山村絵図』が「六所森」と記す。「六所」は各国の惣社の別称とされる例があり、ここでは北山の惣社との関連を考えてみたい」とした上で「自惣社下山」と記す史料があるので、惣社の位置は六所森の北側、衣笠山の東に連なる山の上と推測される³⁾と指摘しており、本稿でもこの見解に従っておきたい。この北山惣社が注目されるのは、もちろん義満が惣社御神楽を開始させ、その地位が高められたからであったが、すでに西園寺時代の北山第に鎮座していた。義満によって地位が高められたにせよ、すでに西園寺時代の北山第に鎮座していた点は見逃しがたい。そこで、まずは義満以前の北山惣社について整理してみたい。

元仁元年（一二二四）、西園寺公経は北山の地に山莊を営んで、西園寺を創建した。その様子は『増鏡』⁴⁾第五「内野の雪」に詳述されている。

かの法成寺をのみこそいみじきために世継もいひためれど、これはなを山のけしきさへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、いはん方なくめでたし。峰殿の御しうと、東の將軍の御祖父にて、よろづ世の

中御心のままに、あかぬ事なくゆゆしくなんおはしける。今の右の大臣、をさをさ劣り給はず、世のおもしにて、いとやんごとなくおはすると聞ゆる、奥ゆかしき御程なるべし。

『増鏡』によると、西園寺の景観は藤原道長建立の法成寺を凌ぐほどであったという。歴代天皇の行幸・御幸も迎えるなど、鎌倉期は西園寺家の権勢の象徴として大いに栄えた。

しかし南北朝期に入ると、西園寺公宗が謀反の科で失脚し、西園寺家も没落した。それにもかかわらず、川上貢によると「戦乱にあけくれ市中を兵火に焼かれて大規模な邸宅がほとんど失われた当時においては荒れはててはいるものの北山殿はかつての豪華な名残を未だ留めていたようで、康安二年二月より四月までの内裏土御門殿の修理期間中、後光厳天皇はこの北山殿を仮皇居に使用されていた」⁵⁾と説明されており、義満が取得する直前まで公家の住居として機能していた。

次に西園寺時代の北山惣社について検討していきたい。西園寺家が北山第に居住していたころは、まだ「北山惣社」という名称ではなかったようである。『御産部類記』⁶⁾所引『公相公記』建長六年(一二五四)閏五月三日条には、次のような記述がみられる。

今日被_レ引_二献神馬三十一ヶ所_一也、自_レ院_(後醍醐天皇)被_レ召_二人々馬十二疋_一、其内三疋左道不可説也、仍被_二返遣_一、其残二十一疋、太政大臣殿令_二沙汰_一進給_(家子并家僕等引進之)、先大臣殿御所進_二御馬廿疋_一、予相具参_二院御方_一、下北面引_レ之、御覽了、被_二返遣_一、次自_レ院被_レ召_二御馬十二疋_一御覽、即被_レ進_二大臣殿_一、相_二計其所_一可_レ被_二引進_一之由、有_レ仰、次第注_二毛付_一以_二友景_一被_レ付_二帥卿_一、_(兼原為経)彼卿或書_二御教書_一、或仰_レ序令_レ付_レ之、其所々如_二宝治度廿二社_一_(伊勢内外賀茂上下)、其外、熊野本宮、今熊野、新日吉、崇徳院・後白川院法花堂、後鳥羽院法花堂、西園寺惣社等也

大宮院(西園寺姑子)の御産の祈願のために、各社に神馬が奉納された。伊勢内外宮、上下賀茂社などと一緒に

に「西園寺惣社」が含まれている。西園寺家ゆかりの神として選ばれたのだろうか、この「西園寺惣社」が「北山惣社」の前身ではないだろうか。ちなみに『昭訓門院御産愚記』乾元二年（嘉元元、一三〇三）五月九日条にも「西園寺惣社」の名称がみられる。ところで「惣社」という語だが『百鍊抄』⁽⁷⁾安元元年（一一七五）六月十六日条には「蓮華王院惣社鎮^二坐八幡已下廿一社^一。其外日前宮。熱田。嚴島。氣比等社本地御正躰図^二繪像^一。但日前宮。熱田御本地無^二所見^一。仍只被^レ用^レ鏡^一とあるのが参考になるだろう。西園寺家が西園寺を建立するにあたって、皇城鎮守神を集合的に祀ったのが西園寺惣社であったと推定されるが、その創建の事情については記録がない。⁽⁸⁾

それでは西園寺惣社では、どのような祭祀が行われていたのだろうか。『公衡公記』⁽⁹⁾正和四年（一二三二）三月二十五日条裏書には、次のような記事がみられる。

於^二西園寺惣社行^二里神樂、^{二百疋、}於^二同所修^二仁王講、^{同仁王講、}於^二北山御廟^{代々御}、一昼夜光明真言、^{百疋、}於^二

同所^一三ヶ日以^二供僧^{一口}可^レ輪転、^{可^レ輪転、}転読法花經、^{五十疋、以上同条、}以上条々毎月以^二吉日^一在^二冬可^レ行^レ之、但於^二三壇

護摩^一者自^二来月^一可^レ為^レ供、其外条々ハ不^レ可^レ違^二今月^一、

西園寺惣社において、里神樂と仁王講が行われている。里神樂には二百疋の経費が用意され、静俊法印が奉行したとある。里神樂の内容は判然としないものの、毎月吉日をもつて実施されていたと記されている。すでに西園寺時代より、惣社では神樂が恒例行事として行われていたことが確認できる。さらに、少し下った時期の記事ではあるが『吉田家日次記』⁽¹⁰⁾応永九年（一四〇二）正月二十九日条にも、次のような記事がみられる。

今日西園寺執行^二池尻殿之間、^{日來号、池尻、而姫君御母儀被^レ号、}送^二使者^一云、惣社御灯^{連夜、}事、日來有^二小田^一、近年以^二現用千余疋、

為^二浦山奉行^一被^二下行^一畢、当年相尋之處、惣用被^レ下行^二行当方^一之由申也、於^二御灯^一者、為^二其外事^一歟之由存^レ之、然而為^二存知^一尋申也云々、予答云、年中神供四十八度、里神樂十二度分、以上万二千疋、此外

神馬代錢三百疋、都合万二千三百疋也、於「御灯」者、可レ為「此外」之条勿論之由返答畢、

北山惣社は、神供が年に四十八度、里神楽が十二度行われ、その経費として一万二千疋下されている。この時期は、すでに義満によって北山惣社御神楽が始められているが、それとは別に里神楽が年に十二度行われていたことがうかがえる。

このように北山惣社は、すでに西園寺時代から鎮座しており、毎月の里神楽が行われていたようである。義満は北山第を取得するにあたり、北山惣社の祭祀も継承したらしい。御神楽を含む祭祀は、社家の吉田兼敦が担当している。

二、北山惣社御神楽と吉田兼敦

応永八年、義満によって開始された北山惣社御神楽は、翌年以降も毎年行われた。年表形式にまとめると、以下のようになる。

応永	八年（一四〇一）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）
応永	九年（一四〇二）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）（吉）
応永	十年（一四〇三）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）（吉）
応永	十一年（一四〇四）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）
応永	十二年（一四〇五）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）
応永	十三年（一四〇六）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）
応永	十四年（一四〇七）	十二月一日	北山惣社御神楽（雑）

応永 十五年（一四〇八） 五月三日 北山惣社三ヶ夜御神楽（雑）

六日 足利義満没

応永 十五年（一四〇八） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 十六年（一四〇九） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 十七年（一四一〇） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 十八年（一四一一） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 十九年（一四一二） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十年（一四一三） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十一年（一四一四） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十二年（一四一五） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十三年（一四一六） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十四年（一四一七） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十五年（一四一八） 十二月一日 北山惣社御神楽延引（雑）

応永 二十六年（一四一九） 正月一日 北山惣社御神楽追行（雑）

十一月十一日 北山院康子没

十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十七年（一四二〇） 十二月一日 北山惣社御神楽（雑）

応永 二十九年（一四二二） 十二月二十六日 北山惣社御神楽（看）

（雑）『御神楽雑記』、（吉）『吉田家日次記』、（看）『看聞日記』

義満は応永十五年五月三日に没しているが、それまでに実施された北山惣社御神楽は、義満の病氣回復祈願の三ヶ夜御神楽を含めても、わずか八回である。それに対して没後の御神楽は、記録から確認されるだけでも十四回に上る。通時的にみると、義満没後も長く継続された行事であったことが確認できる。次に当時の記録に拠りながら、その内容を具体的に考察していきたい。

応永八年十二月一日、初めて北山惣社御神楽が行われた。すでに述べたように、開始の事情は『御神楽雜記』⁽¹⁾所引『信俊卿記』応永八年（一四〇一）十二月一日条に詳しく記されている。

北山惣社御神楽也、当年始而被_レ行_レ之、

所作人

本拍子、^{忠興}末拍子、^{多忠信}付歌、^{同久}笛、^{隆躬朝臣、四條中將}箏、^{兼邦朝臣}篳篥、^{楊梅中將}和琴、^{陪從左方、白星}人長秦久遠、⁽⁵⁾安部季英著座、

一此御神楽被_レ准_二仙洞御願_一云々、仍院司^{寺勸}經豊、上卿勘解小路中納言、^(山井)希代不思議事也、

一隆躬朝臣神楽笛雖_レ未_二伝受_一、自_二北山殿_一被_レ加_二人数_一之間、彼朝臣北小路中納言^(日野)申合之處、彼卿申云、

申_二合綾小路前宰相_一可_二扶持_一□申者、可_レ伝_二受景房_一之由諷諫之間、則隆躬朝臣去月廿四日は尋来之間、

^(信俊)予対面、毎事可_レ加_二扶持_一候、忿々伝受可_レ參之由申_レ之、仍連々予詣_二西大路_一習礼了、

同書によると、この御神楽は「仙洞御願」に准じられ、勧修寺經豊が院司に任じられ、広橋兼宣が上卿となった。この点について、綾小路信俊は「希代不思議事也」という感想を記している。「不思議」という語は「思いはかることもことばで言い表わすこともできないこと」の意もあるが、この場合は「倫理的に非常識なことあるまじきこと。けしからぬこと。また、そのさま」（『日本国語大辞典』第二版）ではないだろうか。信俊は、義満の所為をただ記すだけでなく、同時に非常識だと厳しく批判していたのである。さらにこのときの御神楽において、西大路隆躬が神楽の笛を習得していないにもかかわらず、義満から召人に加えられている。御神楽

の所作人は、義満みずからが選定しようだが、本人の力量や先例を全く無視した荒っぽい人選であったらしい。

翌年の北山惣社御神楽は『吉田家日次記』に詳細がみられる。応永九年（一四〇二）十一月十日条には、

今夕新藤中納言兼吉、使者到来、惣社御神楽如「去年」、可_レ為_二来月朔日_一、可_二存知云々_一、仍則向_二彼宿所_一、令_レ申下_二可_レ存_二其旨_一由上_一了、

とあるように、広橋兼宣の使者が吉田兼敦のもとを訪れて、前年同様に北山惣社御神楽を行うことを伝えていゝる。義満の意向が兼敦に伝えられたのは、兼敦が北山惣社の祭祀を担当していたからであろう。その上で同書
 応永九年（一四〇二）十一月三十日条には、次のような記述がみられる。

早旦向_二新藤黄門_一、則対面、明日惣社御神楽事、於_二社家者_一沙汰具之由令_レ申_レ之、黄門云、飯屋事仰_二知季入道_一了、於_レ今者不_レ可_二辞退_一、可_二結構_一之旨仰含了云々、此事先日予内々入魂了、為_二神事大翻_一、尤公平也、亦此御神楽事以_二十二月晦日_一、可_レ為_二每年之式日_一之由有_二御沙汰_一云々、御神楽所作人、

禄物二千疋下行、大神景繼以_レ之所役之輩悉配分、於_二禄物者_一千三四百疋歟、所_レ残酒肴云々、過分歟之由有_二狂言_一、

翌日の北山惣社御神楽の所作人は、前年と同様であった。^⑫ 所作人の禄として二千疋が下され、大神景繼がそれらを配分した。禄には千三、四百疋が使用され、残りは酒肴に使われたという。

次に応永十年（一四〇三）の北山惣社御神楽について、同じく『吉田家日次記』からみていきたい。同書には、神官の吉田兼敦がどのように関与したのが詳細に記録されている。まず十一月十二日条には、

今日藤中納言兼宣、以_二使者被_レ示_一惣社御神楽事、則_二予向_一彼亭談合了、可_レ為_二来月朔日_一云々、

とあるように、前年同様、広橋兼宣の使者が吉田兼敦のもとを訪れて、北山惣社御神楽を行うことを伝えてい

る。さらに十一月十五日条には、

惣社神用事、以_レ機嫌_二可_レ被_レ申_一驚之由_一、献_二一封於右金吾禪門_一了、

とあるように、兼敦は斯波義将に金品を送り、惣社に対する協力を求めている。前述のように、北山惣社の祭祀は兼敦が担っていたようだが、御神楽についても兼敦が実務を担当していたことがうかがえる。

さらに『吉田家日次記』を読み進めると、十一月十六日条には、次のような記事がみられる。

今夕畠山阿波守_{義清}、入道祐寿、以_二使者示送云、惣社神用事、仰_二北山居住之輩、可_二下行之旨被_レ仰_二下之_一、有_下可_二相談一事_上、明後日可_二立寄云々、早速之御下知、御敬神之至、所_二畏入也、此時分亦右衛門督入道一封到来、同前、祝著々々、

畠山義清は、北山居住の者たちに対して、惣社の神事の料足を課す義満の命を発した。さっそく義将より献金が到着し、兼敦は満足の意を示している。また十一月十八日条には、

早朝向_二勘解由禪門_一悦_二申惣社事_一了、次向_二畠山阿波入道_一、去々年所_レ出之注文渡_レ之、嚴密可_レ加_二催促之旨被_レ仰_二下之云々、偏神慮之所_レ致、亦檀主御敬神也、珍重々々、次又向_二勘禪_一、有_二朝飯_一、則帰了、次又向_二阿州_一、委細猶相談了、

とあるように、兼敦が義将や義清の邸宅を頻繁に訪れて、惣社に関する手配を進めている。そして十一月二十日条によると、兼敦のもとに、義清より料足三千疋が送金されている。

今夕畠山阿州禪門以_二書札并青侍_一、送_二惣社神用料足三千疋了、所_二祝著也、則遣請取了、所_レ残近日可_二下行云々、被_レ仰_二北山居住之輩_一云々、雄劔一腰与_二使者_一了、

この記事からは、北山居住の大名らに対して、それぞれ二百疋が課されていたことがうかがえる。また十一月二十二日条には、

畠山阿波入道以「書札并使者」、送「惣社神用五千四百疋」、則遣請取了、嚴密早速、御敬神之至也、(中略)
次向「畠山阿州」悦申了、

とあるように、義清より料足として五千四百疋が送金された。さっそく兼敦は義清のもとを訪れて礼を伝えている。その上で同書十一月二十五日条には、新たに義清より千六百疋の料足が届いたことが記されている。

惣社神用、又千六百疋到来、畠山阿州禪門奉行也、以上万疋也、被「仰出」之後、十ヶ日中也、迅速之下行、神慮時儀純熟之故也、云「彼」云「是所」畏存「也」、

結局、この年の料足の総額は、一万疋に上った。『吉田家日次記』には明示されないが、おそらく義満自身も献金しただろう。しかし、料足のお半は、北山居住の大名たちから供出されている。

さて『吉田家日次記』応永十年(一四〇三)十二月一日条には、この年の北山惣社御神楽が詳述されている。

今日北山殿惣社御神楽也、仍西刻著「束帶」^(吉田)、同車兼富^(衣冠)、参「入」之、忠敦^(布衣)、参候、隆躬朝臣并伶人等参集、院司并兼邦朝臣遅参云々、

先奉開「御戸」^(兼富)、即供「二」旬供^(役之)、兼富、忠敦^(布衣)、勤「三」手長、申「二」詔戸、撤之於「三」拜殿、相「二」待奉行「参」^(万里小路)之處、頃之院司右中弁豊房朝臣^(束帶)、参入之、楊梅中将兼邦朝臣^(束帶)、同参「二」仕之、次供「二」神供^(一)、予陪膳、両輩手長、小神兩所供^(忠敦)之、次予奉幣、次廻「二」神馬^(代錢三百疋、兼日被下)、神人正夏男引「廻」之^(宝前御勢廻)、次申「祝」^(音)

戸、次撤^(レ)之、

先是以「兼富」進「殿内」、奉「仕」新御簾、是古物、曆応之調進也、依^(レ)経「年序」、已朽損之間、被「調進」之、両殿并小社「二」字也、小社奉「三」打付「之」、雖^(レ)廻「種々策」、不^(レ)得「開」之間、先供「二」御戸外「了」、凡御装束等朽損以外也、為^(レ)之如何、

次被行「御神楽」、堂上所作二人也、大宮中将隆躬朝臣^(束帶)、進出、発「三」笛声、次楊梅中兼邦朝臣

同各引綱、雖為降雨、
為堂上之儀之故也。

進出、發^二簾^一、

此座飯屋^三間^二面^一、

北第一間敷^三、

赤縁帖^三一枚^二於^二奥端^一、

為^三兩朝臣座^一、

其次奥端敷^三、

備^三円座^一、為^三

伶倫座^一、

此間豊房朝臣著^三、

拜殿^一、帖^三枚敷^一、

予同著^三此所^一、

赤端帖一枚同敷之、与并対座、此畳等曰御所被渡、
之、殿中納言兼宜卿西朝計參入、以下家司被渡之了。

下家司參候、庭燎如^レ例、

拜殿前同有^二立明^一、

御神楽儀及^二亥下^一事了、

兼富閉^二御戸^一、

此間甚雨如^レ拔、

弁并兩朝臣至^二惣門歩儀^一、

予

相^二件之^一、

深泥心勞頗失度了、

然而無為殊珍重也、

伶人兩三輩^三、甚雨不^レ得^二退出^一、

參^二宿宝前^一云々、

北山惣社御神楽の神事に先立つて、吉田兼富が殿内に進み、暦応年間に調進されたという御簾を新調している（おそらくその費用分を例年より多く徴収する必要があったのだろう）。義満期の北山惣社の社殿は、遅くとも

暦応年間（一三三八～一三四二）には建造されていたことになる。

さて『吉田家日次記』の詳細な記事にも、義満が御神楽に臨席した様子はない。義満は、御神楽の開催を命

じたものの、自身が参列することはなかった。両統迭立の時期、後伏見院、花園院らによって持明院殿新宮御

神楽が行われていたが、御神楽には院や皇子らも参列している。¹³ もし義満が、持明院殿新宮御神楽を先例と

して北山惣社御神楽を行ったとすれば、自身が一度も参列しないことはなかったのではないか。

三、北山惣社御神楽と綾小路信俊

ここで北山惣社御神楽から視点を移して、当時の綾小路信俊の立場について確認しておきたい。そもそも中世の綾小路家について、池和田有紀は「鎌倉期、宇多源氏のこの一族は、持明院統の近臣であった。そして南北朝以降、持明院統直系の崇光院が伏見に赴いてからは、その伏見御所に仕え、伏見宮の近臣となる」とし

た上で「信俊ら綾小路家も、頻繁に御所を訪れ、主に音楽の面で奉公している」⁽¹⁴⁾と指摘している。『信俊卿記』を著した綾小路信俊は、御神楽の拍子や和琴を専門とする殿上楽人であった。父の敦有は、南北朝期の内侍所御神楽に奉仕して、北朝の御神楽の維持に貢献した楽人であった。信俊は、義満の代から御神楽に参仕するようになった。

一方、崇光院流（伏見宮家）の近臣であった綾小路家は、後光厳流の天皇とそれを支えた幕府と微妙な関係にあった。当時の信俊の立場について、坂本麻実子は「信俊は崇光院、栄仁親王、貞成王の三代に仕えた伏見宮家の重臣であったが、公家社会における宮家の不遇は、即ち臣下である綾小路家の不遇であった」⁽¹⁵⁾と指摘している。実際、信俊と義満の相性は悪かったらしく、応永七年の殿上淵醉では、義満の勘気を蒙ったために、信俊は参仕を停められている。⁽¹⁶⁾音楽の家である綾小路家にとって、朝儀の出仕を停められることは、大きな問題であった。

さらに綾小路信俊は、応永四年（一三九七）から同十一年（一四〇四）までの長期間に渡って内侍所御神楽に参仕していない。『信俊卿記』応永四年十二月三十日条には、次のような記事がみられる。

内侍所両座御神楽也、奉行藏人右中弁資家、（土御門）中目野、藏人右中弁予依兼日之催、可参之由相存、始神事之处、今朝五躰不具穢出来之間、無力不参、無念也、相尋兼邦朝臣記之、

予自当年至応永十一年不参、自同十二年参也、

歌例物共、無対歌、

所上人

本拍子、資致、自末拍子、忠興、笛、景秀、篳篥、臨時中院宰相中将光顯、和琴、從出羽守、人長、い、安部季英著座、

次恒例行之、韓神終、勸盃相尋奉行之处、資家無左右来仰星、則退出宿所、希代事也、然之間、

忠興申云、此上者不_レ可_レ唱_二前張之由称_レ之、即唱_レ星云々、未曾有事也、末代之作法驚人、資敦有若_レ亡、如_レ存如_レ亡、不_レ及_二是非_一、浅猿々々、

この年の内侍所御神楽は、五体不具穢₍₁₇₎による不参であった。しかし同書応永七年（一四〇〇）十二月条によると、

御神楽、所見不_レ見、予_(綾小路信俊)重服之上、依_(義満)北山殿勘氣不_レ参也、

とあるように、この年の内侍所御神楽は、信俊の重服の上に、義満の勘氣を蒙ったために不参であったと記している。また、北山惣社御神楽が「仙洞御願」に准じて行われた応永八年の内侍所御神楽では「予_(綾小路信俊)、北山殿雖_レ有_二御免_一、窮困之間、申_二請不_レ参_一₍₁₈₎」というように、義満の怒りは解けていたものの、困窮のために不参を申し入れるという散々な生活を送っていた。御神楽の拍子を家業とする信俊は、応永八年の北山惣社御神楽の開始時、御神楽に奉仕できる環境になかったことがうかがえる。おそらく信俊は、北山惣社御神楽を複雑な思いで眺めていたに違いない。先述のように信俊が「被_レ准_二仙洞御願_一」とした上で「希代不思議事也」という感想を記した背景には、義満やその後見を受けた後小松天皇に対する不満や不信感が考えられなければならないだろう。

ようやく信俊が北山惣社御神楽に参仕できたのは、応永十二年（一四〇五）であった。『信俊卿記』同年十二月一日条には、その召人と曲名が詳細に記されている。

北山惣社御神楽也、予_(綾小路信俊)自_二当年_一始而参仕、

目六

庭火、縫合、阿知女作法、_(於四)櫛、_(尻上)韓神、_(抱子)次才男子、次音取、阿知女作法、_(於四)次薦枕、閑野、篠波、千歳、早歌、星、_(三首)朝倉、其駒、

所 作 人

本拍子、予末拍子、忠興付歌久乙、多忠信、同忠貞、同忠興笛、隆躬朝臣、四條中將筆簾、兵部卿楊、梅葉邦卿和琴、陪從経方、出羽守人長秦久遠、景房、安部季英

等著座、

北山惣社御神楽の構成は、内侍所御神楽とほぼ一致する。ただし、当時の内侍所御神楽は、公卿所作の臨時御神楽と、地下も参加する恒例御神楽に分かれており、一晩で完結する場合も二座が実施された。北山惣社御神楽は一晩に一座のみであり、内侍所御神楽とは明らかに異なる行事と認識されていた。小川剛生は「義満の法皇氣取り、あるいは周囲の阿諛に出ていることは誰もが承知していて、逆らえないからたまたまそのようにしているだけという、醒めた空氣のあったことは指摘しなければならない。また北山惣社神楽もあくまで義満の私的な催しとみなされていた」とした上で「中殿御会や内侍所御神楽のように内裏で行われる「公宴」とは明瞭に区別されていたことが確かめられる」¹⁹⁾と指摘している。先述のように、綾小路家は伏見宮家の近臣であったために、後光厳流とそれを支えた足利將軍家と疎遠で、実際に義満は信俊を冷遇し続けた。『信俊卿記』に、義満に対する批判的文言が頻出するのも、長年の関係を背景に考える必要があるだろう。

義満の信俊に対する態度は、所作の樂器にも示されてくる。『信俊卿記』応永十三年（一四〇六）十二月一日条には、次のような記事がみられる。

北山惣社御神楽也、〔西大路〕隆躬朝臣病氣之間、〔綾小路信俊〕予可_レ為_レ笛所作之由、以_二裏松_一承之間、〔日野重光〕俄神樂笛_お景秀_二伝_一受之、

目六

庭火、縫合、阿知女、榊、無尻上、比興也韓神、才男子、音取、誰贅人、閑野、千歳、折之早歌、星、三首先音取、朝倉、其駒、

所 作 人

本拍子、忠興末拍子、多久付歌、多忠信、同忠信、清、同久武笛、予、初度筆策、兵部卿楊梅兼邦卿和琴、陪從經方、出羽守、五位人長秦久遠、(大神)景房、安部季英等
著座、

予被_レ催_レ笛之間、拍子地下也、神楽之体以外比興、左道珍事也、凡追_レ年隨_レ日雖_レ陵遲、事外聊爾、最略行_レ之、不可然歟、更不_レ可_レ成_二祈禱_一、猶々不快珍事也、予笛所作当年初度、俄被_レ仰之間、初而渡_レ之、雖_二聊爾不可然_一、依_二北山殿貴命無力_一、(義満)

西大路隆躬の病氣により、綾小路信俊が笛で奉仕した。信俊は笛の経験がなく、しかも急な義満の命であったことから、山井景秀より伝受している。前年は本拍子をとった信俊にとって、未経験の笛を命じられたことは、大変な屈辱と感じられたらしい。この日の北山惣社御神楽について、信俊は「以外比興」、「左道珍事」、「事外聊爾」、「不可然」、「不快珍事」と激しい口調で批判している。自分が本拍子の役を地下に奪われた不満に加えて、義満に対する日頃の鬱憤も認められるのではないか。さらに、同書応永十四年（一四〇七）十二月一日条によると、前年の北山惣社御神楽に続いて、信俊はこの年も笛で奉仕させられている。

北山惣社御神楽也、予綾小路信俊笛所作、(掛力)白野重光毎年裏松奉_二行之_一、(鳥丸)弁豊光著座、

目六

庭火、縫合、阿知女、柳、之本共深龍、之無尻上韓神、人長誰贅人、閑野、篠波、千歳、早歌、星、三首朝倉、其駒、

所作人

本拍子、忠興末拍子、多久付歌、多忠信、同忠信、忠清等也笛、予、兵部卿楊梅兼邦卿筆策、陪從經方、出羽守和琴、(山井)人長秦久遠、陪從一人景房、安部季英等著座、

その一方で、翌応永十五年（二四〇九）七月十七日より三ヶ夜の内侍所臨時御神楽が行われており、第一夜、第二夜、信俊は本拍子をとった。しかし第三夜は信俊がみずから望んで笛を所作している。(20) 私的な行事であっ

た北山惣社御神楽が、朝儀の内侍所御神楽に与えた影響として注目されよう。

なお「仙洞御願」に准じて始められた応永八年の北山惣社御神楽では、院司・上卿が任じられているが、翌年以降に院司・上卿が任じられた様子はない。おそらく「仙洞御願」というのも、義満が一回に限って行ったものであり、南北朝期の院の恒例の御神楽を踏襲するような意識は、最初から全くなかったのではないか。

応永十五年（一四〇八）五月、義満は病に倒れて危篤状態となった。『信俊卿記』同月三日条には、次のように記されている。

於「石清水社」、自「禁裏」被「行」勅願御神楽、其故者、北山殿自「去月晦日」有「御違例」、次第興盛之間被「行」之、所作人地下輩云々、歌数例物共最略云々、

本拍子、忠興末拍子、多久付歌、多忠信 同忠信 景房笛、楊梅箏、安倍和琴、陪從 終方人長、泰久遠、陪從子息今一人著

座、秘曲無_レ之、

同夜於「北山惣社」被「行」三ヶ夜御神楽、堂上兼邦卿只一人被「召加」之、爰今日自「禁裏」、於「八幡」被「行」御神楽之間、皆參「八幡」之間、被「遣」飛脚被「召」之、仍子刻許皆京著、寅刻許被「行」北山御神楽云々、所作人同八幡、但兵部卿一人被「召」加之、歌数常物共、笛景秀、重々有「子細」、景房与「景秀」相論、景秀申勝、景秀作「三ヶ日」皆吹_レ之、

この日は、義満の病氣回復祈願のために、石清水八幡宮寺において勅願御神楽が行われた。さらに同夜からは北山惣社においても、三ヶ夜の御神楽が行われることになった。翌四日条には、

北山惣社三ヶ夜御神楽第二ヶ夜也、人数歌数如「昨日御神楽」、未下程事訖、面々退出云々、北山殿今日昼程事切之由披露、雖_レ然又及_レ晚被「蘇生」云々、

抑_{山科}今夕自「内蔵頭許」給_{敬興明使}使者云、於「北山惣社」被「行」三ヶ日御神楽候、明日結願候、雖_レ然明日者例日

候、明後日^{六日}、可^レ有^二竟宴御神楽^一候、可^レ有^二笛所作之由申給^レ之、則領状了、

とあるように、昼に義満死去の報が入ったが、夜になって蘇生したために、北山惣社御神楽の第二夜が行われている。そして六日条には、次のような記事がみられる。

今日北山惣社御神楽三ヶ日竟宴也、被^レ念之間、予寅刻参^二北山殿^一、早皆々参集、但北山殿御違例猶興盛、

(綾小路信俊)

散々之義云々、然之間暫可^二相待^一之由、自^二裏松^一、予申給之間、自^二惣社下山^一、詣^二上乘院之坊^一待申之處、

(野重光)

又給^二使者^一、今より不^レ可^レ叶間、可^レ略^二御神楽^一、先可^二退出^一之由、自^二裏松申給之間^一、予則退出了、北山

殿今夕事切了、仍三ヶ日御神楽二ヶ日、結願終無^レ之、不^レ落^二御神楽道之地効験也^一、笛事景房、景秀相論、

至^二去三日^一禁裏御願景房吹之、北山御神楽者、乍^二三ヶ日^一申^レ勝、景秀吹^レ之、奉行豊光云々、予此御神

楽終不^レ参事、一者無念、一者可^レ謂^二高運^一、当家御願、御神楽二参而御願無^レ謂^二不^レ叶之由^一、自昔申^二伝之^一、

今度之儀不^レ可^レ叶之間、始兩日者不^レ被^レ催、結願者雖^レ被^レ催、無^二御神楽^一、終予此御神楽二不参、自愛者也、この日の夕方に義満が死去したために、北山惣社御神楽の第三夜は実施されなかった。第一夜、第二夜に奉仕しなかった信俊は、第三夜は出仕する予定であったが、結局その機会がなくなつた。

第三夜の御神楽がなかったことに対して、信俊は「不^レ落^二御神楽道之地効験也^一」と手放して喜んでみせた上で、また「無念」であり「高運」であつたと記している。そして御神楽に参仕すれば御願が果たされないこととはしないとする家伝に背かなかつたと喜んでゐる。義満の死に対しても、信俊は義満に対する複雑な思いを隠すことはなかつたのである。

四、北山惣社の遷宮とその後の御神楽

義満没後の北山惣社御神楽は、どのように行われたのだろうか。引き続き『信俊卿記』から整理したい。義満没年の応永十五年十二月一日条には、次のように記されている。

北山惣社御神楽也、今夜彼宮移也、自_レ去年_レ被_レ沙汰懸、北山殿御遠行之間、至_二于今_一延引、今夜被_レ行_レ之、

宮移之儀訖之後、行_二御神楽_一、

目六 〔朱書〕「北山惣社御神楽宮移ノ年」

庭火、縫合、阿知女、榊、韓神、誰贅人、篠波、千歳、折也、早歌、星、三首、朝倉、其駒、奉行弁無_レ之、

所 作 人

本拍子、忠興、末拍子、多久、付歌、多忠信、同、笛、〔綾小路信俊〕筆策、兵部卿楊梅兼邦職、和琴、陪從經方、人長泰久遠、陪從子息一人、〔山井〕景秀、

安部季英等著座、御神楽殊勝無_レ極、

北山殿当年五月御入滅之後、無_レ程惣門之内之式相替、冷然哀也、仍如_レ此思連、〔朱書〕「於惣社御前此歌ヲ詠也」

北山惣社は、前年から遷宮の準備が進められていたようだが、義満死去によってこの日まで延期されていた。義満没後、北山惣社も衰微したようだが、御神楽は恒例行事として継続している。

さて、綾小路信俊は、応永十五年までは笛を所作していたが、応永十六年（一四〇九）は本拍子をとっている。同書同年十二月一日条には、次のように記されている。

北山惣社御神楽也、〔綾小路信俊〕予此間者雖_レ為_二笛所作_一、有_レ存_二子細_一、今夜取_二拍子_一、

歌目六 〔朱書〕「北山惣社御神楽」

庭火・結合・阿知女・榊〔尾上〕韓神〔拍子上〕才男子・閑野・磯等・千歳〔折々〕早歌・星〔三首〕朝倉・其駒、〔人長〕

所 作 人

本拍子、予、末拍子、忠興 付歌久乙・多忠信・同忠清・同忠貞 笛、景秀 簞築、兵部卿楊梅兼邦卿 和琴、陪從幹方・出羽守・五位 人長秦久遠、安部季英著座、

その先は、応永十七年のみ笛に戻っているものの、以降は不参や遅参の年以外は本拍子をとっている。一方、同時期の内侍所御神楽では、信俊は不参に追い込まれていた。同書応永十五年十二月二十九日条には、

内侍所二座御神楽也、綾小路信俊予不_レ被_レ催、其故者、去御懺法講不参、其咎云々、無力之次第也、

とあるように、応永十五年の内侍所御神楽は、御懺法講不参の罰として、信俊は参仕を停められている。義満没後も、信俊は後小松天皇の勅勘を蒙るなど、引き続き朝儀で冷遇されていたようである。また同書応永十六年十二月二十五日条にも、次のように記事が確認できる。

今夜内侍所御神楽二座有_レ之、臨時奉行清房、（金生山）九条左少亮恒例奉行（綾小路信俊）予兼日雖_レ被_レ催、猶無_二御免、仍不参、歌

榊以下此間物共云々、

所 作 人

本拍子、資教朝臣・五位末拍子、忠興 付歌久乙・多忠信・同忠清・同久武 笛、景秀 簞築、兵部卿楊梅兼邦卿 和琴、陪從 人長秦久遠、則始行、恒例、簞築、

安倍季英 自余同前、於_レ事散々之由、兵部卿相語也、

この年の内侍所御神楽についても、後小松天皇の勅勘が解けなかったらしく、引き続き不参であった。その一方で、応永十五年の北山惣社御神楽には笛の召人として、さらに同十六年には本拍子として参仕している。つまり信俊は、内侍所御神楽の出仕を停められる中にあっても、北山惣社御神楽の本拍子とはっていたことになる。もし北山惣社御神楽に後小松天皇や義持が関与していれば、内侍所御神楽と同じく信俊の参仕は許されなかったであろう。すなわち義満没後の北山惣社御神楽は、朝廷や幕府の関与や影響は全くといってよいほどなく、北山惣社の私的な祭祀として行われていたのである。

それでは、北山惣社御神楽は、いつ記録から姿を消すのであろうか。『信俊卿記』応永二十五年（一四一八）十二月一日条には、次のような記事がみられる。

惣社御神楽無^レ之、其故者、女院^{（表松康子）}御参宮之間、不^レ被^下二御訪^一之間、地下者等不^レ可^レ参之由申之間、無力延引而、内々正月二日夜被^レ行^レ之云々、

応永二十五年の北山惣社御神楽は、北山院康子が不在で御訪が下されなかったために、地下楽人が参上せず延期となった（翌応永二十六年正月一日に追行）。義満没後の御神楽は、康子を中心に継続されたようである。『信俊卿記』には、応永二十七年までの北山惣社御神楽が確認でき、期日や規模に大きな変化があった様子はみられない。北山院康子は応永二十六年に没しているが、その後も数年間は御神楽が継続されているのである。なお『御神楽雜記』^乾は、応永二十七年を最後に北山惣社御神楽の記事が途絶えている。

この北山惣社御神楽が最後に確認できる記事は『看聞日記』^{（21）} 応永二十九年（一四二二）十二月二十六日条である。

聞、今日北山惣社御神楽云々、源宰相参之由申、^{（後小路信俊）}

北山第は、義満没後、義持の三条坊門第に一部が移建された。さらに北山院康子没後、寝殿は南禅院に、公卿間は建仁寺に、天鏡閣は南禅寺に、懺法堂は等持寺に移築されている。そして同二十七年には鹿苑寺と改められた。北山惣社御神楽の記事は、応永二十九年まで確認される。北山第が鹿苑寺となつてからも北山惣社は残されたようだが、次第に衰退し、御神楽も行われなくなつたらしい。^{（22）}

おわりに

北山惣社御神楽は、北山第を取得した足利義満が、西園寺家の祭祀を継承する形で始められた。この御神楽をめぐっては『信俊卿記』の「被^レ准^二仙洞御願^一」という記述を中心に取り上げられ、義満が院のごとく振る舞ったとする同時代史料として注目されてきた。しかし義満は、南北朝期の持明院殿新宮御神楽のように、自身が御神楽に参列することはなく、またその経費も北山居住の大名らに依存していた。

この記事を残した綾小路信俊は、義満や後小松天皇に冷遇され、特に家業である御神楽に対しては激しい批判を繰り返していた。従来の研究では『信俊卿記』に対する史料批判が充分でなく、義満に強い不満を抱く信俊の立場が考慮されていなかった。「被^レ准^二仙洞御願^一」という記述についても、義満や天皇に対する信俊の批判的視点を踏まえつつ「希代不思議事也」の感想とともにとらえ直されるべきだろう。

義満没後の北山惣社御神楽は、期日や規模を大きく変えることなく恒例行事として継続したが、後小松天皇や義持らが関与した形跡はない。北山惣社の祭祀は、北山院康子が継承したらしく、康子の没後も継続している。しかし北山第の規模縮小にもなって北山惣社も衰微したとみられ、やがて御神楽も廃絶したと考えられる。

注

- (1) 今谷明『室町の王権 足利義満の王権篡奪計画』中公新書、平成二年など
- (2) 桜井英治『日本の歴史12 室町人の精神』初出講談社、平成十三年、講談社学術文庫、平成二十一年など
- (3) 細川武稔『足利義満の北山新都心構想』（中世都市研究会編『中世都市研究15号 都市を区切る』山川出版社、平成二十二年）
- (4) 本文は、講談社学術文庫による。
- (5) 川上貢『義満の室町殿と北山殿』（『日本中世住宅の研究（新訂）』中央公論美術出版、平成十四年）
- (6) 本文は、図書寮叢刊による。
- (7) 本文は、新訂増補国史大系による。
- (8) 村山修一は「凡そ惣社なるものは、多くの神々の総合的な祭祀たるところに特色があり、これによつて靈験の総合的な威力を期待し、鎮護の意味を強化せんとする意図を表示してゐるのである」（『中世に於ける神々の勧請』高瀬重雄編『中世文化史研究』星野書店、昭和十九年）と説明している。
- (9) 本文は、史料纂集による。
- (10) 本文は、大日本史料による。
- (11) 本文は、大日本史料による。
- (12) 『御神楽雜記^乾』所引『信俊卿記』応永九年（一四〇二）十二月一日条
- (13) 拙稿「持明院統の院と新宮御神楽」（新潟大学人文学部『人文科学研究』一四一輯、平成二十八年十一月）
- (14) 池和田有紀『郭曲相承次第』再考（宮内庁書陵部『書陵部紀要』六十一号、平成二十二年三月）
- (15) 坂本麻実子「十五世紀の宮廷雅楽と綾小路有俊」（東洋音楽学会『東洋音楽研究』五十一号、昭和六十二年三月）
- (16) 『淵酔部類記』所引『信俊卿記』応永七年（一四〇〇）正月二日条
- (17) 『日本国語大辞典』第二版には「獣類にかまれて身体の一部を欠損して死に至った者が出たり、これに準ずる不祥事が発生したりした際に、穢に触れた場での公儀を中止したり、穢に関わりある者が七日あるいは三〇日の間謹慎

すること」と説明されている。

(18) 『御神楽雜記^乾』所引『信俊卿記』応永八年(一四〇二)十二月二十四日条

(19) 小川剛生「北山殿での祭祀と明国通交」(『足利義満 公武に君臨した室町將軍』中公新書、平成二十四年)

(20) 『御神楽雜記^乾』所引『信俊卿記』応永十五年(一四〇九)七月十九日条

(21) 本文は、図書寮叢刊による。

(22) 本田安次は、北山惣社御神楽について「享徳三年(一四五四)五月六日にボツリと記録が見えてゐる(有俊卿記)」と指摘している(「各所の御神楽」『本田安次著作集 日本の傳統藝能 第一卷』錦正社、平成五年)

【付記】 本稿は応永・永享期文化論研究会九月例会(令和二年九月二十日、オンライン開催)における口頭発表に基づく。発表に際して貴重なご教示を賜った先生方に厚くお礼を申し上げたい。なお、本稿は令和二年度科学研究費助成事業(若手研究 研究課題番号 18K12281)による研究成果の一部である。